初校 2019.9/19

る。ハルモニの作文では、ハルモニ自身が自分の足で立って声を上げるアクティビスト、当事者、物語の主人公であり、また、その物語を紡ぐ張本人である。ここに、私たちは、「歴史の被害者」の型に留まるのではなく、ハルモニらしさに自ら揺さぶりをかける新たなハルモニ像を見出すことができる。要請され、作り出され、消費されるハルモニらしさにハルモニ自身がどのように対峙しているのか――迎合しているのか、葛藤しているのか、対抗しているのか――。既存の価値観を乗り越えたところで展開されるこのような活動や議論を今後も期待したい。

このように、本書に掲載されているハルモニの作文は、数多くの重要な質問を投げかけてくれる。人の移動はしばしば、移動者の動線それ自体が注目されがちである。本書は、新たな時代の様々な要請によって動かされてやってくる人々（cf. "migration infrastructure"［Xiang & Lindquist 2014］）を受け入れていくホスト社会側への戒め、教訓、知恵を授けてくれる。また、コミュニティー活動の実践者、アクションリサーチャーだけではなく、社会構築主義的な視点で研究プロジェクトを行ったり、ナラティブを用いる研究者たちにとっても、示唆に富む一書ではないだろうか。

参考文献

Xiang, Biao & Johan Lindquist (2014) "Migration infrastructure", *International Migration Review* 48 (1), pp.122-148.

川上郁雄、三宅和子、岩崎典子 編
移動とことば

くろしお出版、2018年

［評者］パトリック・ハインリッヒ
Patrick HEINRICH

『移動とことば』と題する本書は、社会言語学の中に「モビリティ」という概念を取り入れ、定着させようとする、最近十年の思想潮流を汲む論文集である。社会言語学において「モビリティ」が注目され始めた理由には、急速なグローバリゼーションや都市化のプロセスが深く関係している。それと同時に、一般社会科学領域における「モビリティ・ターン（mobility turn）」の流れにも同調している。つまり、社会科学や人文科学では、すでに「モビリティ」あるいは「移動」という概念が理論化されており（アーリ 2015を参照）、モビリティは二次現象として扱わないようになった。つまり、それは、相互行為を形成すると同時に、相互行為で使われる資源でもあるという意味において、主要な研究関心事として位置づけられる。こうした社会科学や人文科学における「モビリティ・ターン」は、単なる「分布（distribution）の研究」を疑い、その傾向に基づいてテーゼを発見していこうとする、「ヒューリスティック」な研究法を生み出した。

社会言語学の場合、分布の分析という手法は、これまで、「言語」と「言語変種」はどのように「地理」、「時間」あるいは「階層」によって分布するのかを究明するのに用いられてきた。当然ながら、この種の「分布の社会言語学（the sociolinguistics of distribution）」では、モビリティという概念は主要な関心事にはならなかった。社会言語学におけるモビリティ・ターンは、Jan Blommaert（2010）の主導によるところが大きい。『移動とことば』は、このような社会言語学における流れにとっての、いわば、メガ・トレンドの一部として重要視されうるものである。さらに、この論文集は、現代社会言語学における「マイクロ視点」と「相互作用」にも焦点を当てているという特徴もある（Eckert 2018を参照）。

『移動とことば』は二部構成~~にある~~になっている。「移動の中のことばとアイデンティティ」と題する第1部は五つの章から、「移動の中のことばとライフ」という第2部は六つの章から成る。すべての

トル？

章は、インタビューと参入観察から得たデータを論拠として利用と提示する。こうした質的データが含まれるため、この本は読みやすく仕上がっている。すべての章が、論文テーマに関わる最新動向の紹介、方法論とデータ収集に関する議論、データの提示、「移動とことば」への理解のための考察という順序で論じられる。

第1部は、岩崎典子の「『ハーフ』の学生の日本留学――言語ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリー」という論文で始まる。冒頭説明されるのは、本質主義的なルーツ（roots）の概念に代わって、ルート（routes）を考慮することの重要性である。この論文では、自分を「ハーフ」と呼称する日英女性の、日本留学中とその事前および事後の自己省察が研究されている。岩崎によれば、日本とイギリスそれぞれにおいて概念化された「自己」の関係性は、多面的なものへと変化し、機能的にも区分化され、さらには混在するようになる（p.32）。

サブタイトルも入れました。

倉田尚美による第2章は、「移動する青年のことばとアイデンティティ――オーストラリアで継承日本語を学ぶ学生の事例から」である。研究対象は、オーストラリア在住の三人の人物（18歳から22歳まで）の持つ自己概念（セルフ）である。そこでは、「将来なりたい自分」と「将来なるべきと考える自分」との関連づけと、さらに、オーストラリアでの継承言語としての日本語学習が、彼らの認識にどのような影響を与えるのかが調査されている。

第3章では山内薫が「日仏国際家族環境を背景に持つ日本語専攻修了生の『移動』の経験と意味づけ」を探求する。被験者であるサラという若い女性は、日本人の父親とフランス人の母親を持つが、両親の離婚と母親の再婚を期に、父親とのコンタクトが少なくなった。その結果、日本語をはじめとする日本文化にほとんど接触しなくなった。高校卒業後、彼女は大学で日本学を勉強することにした。この研究で調査されたのは、彼女にとって、大学在学中および卒業後における日本語学習が彼女自身にどのような影響を及ぼしたのかということである。この事例によれば、どんな強度をもった経験を、いつ、どういう順序で経験したのかという経験の中身が、より重大な要因であることがわかる。

「子どもたちが『移動しながら生きる自分と向き合う』授業実践――シンガポール日本人学校の事例から」というテーマの第4章は、本間祥子によるものである。伝統的に、継承言語教育の研究分野は、以下の前提に基づいて行われてきた。つまり、「海外子女教育は、これまで一貫して『国籍』＝『（帰国を前提にした）日本人』＝『国民教育としての海外子女教育』という枠組みのもと、『日本人』の育成と『日本人』としてのアイデンティティ形成理解教育を目標として行われてきた」（p.89）。この研究において、本間はシンガポールの日本学校に通う小学生の書いたテキストを分析している。日本あるいは他の国に引っ越す生徒は、その前に「私のふるさと」をテーマとする小論文を書かなければならないのだという。著者は、このテキストを分析し、子どもたちが移動しながら生きる自分とどう向き合っているのかを考察している。

第1部の最終章は、人見美佳と上原龍彦の「外国につながる子どものキャリアデザイン――『国』『ことば』の認識との関わりに着目して」と題される論文である。キャリアデザインを考える際に、モバイルの子どもたちは、次のようなステレオタイプ的な見方と対峙しなければならないのが常である。つまり、「Z国人だからZ国語とZ国の文化も知っておかないと」、「Y国と日本の架け橋に」、「日本で生きていくために母語よりも日本語をしっかり勉強しないと」（p.106）等々である。被験者である二人の若者が、日本社会の中で（一時的）な居場所を見つけるために、彼らに対する社会的な期待と彼ら自身の計画との間に生じてきたいくつもの矛盾と対峙する模様が描き出されている。もともと「A国かB国のどちらかで」という選択肢として形作られていた彼らの生活場所は、現在における彼らの生活では、「A国とB国の両方で」というように変化したのだという。

加えました。

本書第2部は、三宅和子の「国際結婚家庭2世代の『移動』と『選択』――母から娘の50余年間の軌跡をたどる」という論文で始まる。この研究では、1960年代イギリスに移住し、結婚し、イギリス人の夫と二人の子どもをもうけたある日本人女性の家族が、以後三世代にわたって、どのような生活史的変遷をたどったのかということが、イギリスと日本との社会的関連と、モビリティやテクノロジーの変革との関連において描写されている。この研究において興味深いのは、国際的な両親のもとで育った子どもたちの生活においては、自分自身を新たに「国際化」するという過程が選択肢として含まれていたという指摘である。このような「国際化」は、直線的で目的論的な定形のプロセスではなく、何か予想外の機会や出来事との出会いや、それに応ずるために取られた手段としての選択肢のことを指しており、それらは、個人個人異質なものである。

第7章は上田潤子による「ある中国残留孤児の系譜――一世から四世までのインタビュー」という論文である。この論文も、ある家族の三世代にわたる生活史が探究されている。この家族全員の詳細な人生紹介は紙幅の都合で

割愛するが、彼ら家族に共通して生活上の困難を引き起こした事象が一つだけあったのだという。それは、「ことば」である。つまり、家族の中で一人一人多様である日本の日常生活では、各々が各々の言語能力を十分に向上させる必要があったのである。

八木真奈美による第8章は、「移住者の語りに見られる『経験の移動』が示唆するもの——Agencyという観点から」という論文である。これは三人の女性移民を題材にしたものである。一人は、日本に留学後、日本人と結婚し、中学生の子どもを一人持つ女性である。もう一人は、同様に留学後日本人と結婚し、高校生と大学生の子どもがいる女性である。三人目の女性は、留学後職場の同僚と結婚し、その夫が日本への転勤となったため一緒に日本へ移住したという女性である。この三つの事例によって、過去の経験が現在の生活にとってどういった重要な役割を果たすのかが調査された。移動は単なる経験ではなく、個人の移動に伴って絶えず新しい評価と行動を発生させる根本である。

第9章は「国境を超えたあるろう者のライフストーリー——ろう者にとっての「移動」と「ことば」」という表題の、大塚愛子と岩﨑典子による論文である。この論文では、日本人のろう者と結婚しているトリニダードトバゴのろう者が調査されている。ろう者は、単にさまざまな言語レパートリーや能力があるだけでなく、彼らはコミュニケーション上の様々な問題を経験しながら成長する。このような経験は、ろう者の人生に永久的な影響を与える。

第10章は、山下里香の「移動するパキスタン人ムスリム女性の青年期の言語生活」という論文である。山下も個人の生活に焦点を当て、外国国籍を持つ十代後半から二十代はじめの四人の若い女性を研究対象に、民族誌的アプローチによる研究を行なっている。被験者の女性たちは日本語以外にもいくつかの言語を使う。彼女らの生活においては、ことばどうしが対立したり、競合したりすることがあり、分析では、この種の対立は特にウルドゥー語とパンジャブ語の間に生じるという事例が示されている。つまり、ウルドゥー語は公共的に高い評価を受ける言語であるのに対し、後者の言語はそのウルドゥー語の能力向上を阻害する言語なのだという。

第11章は川上郁夫の「『移動する子ども』からモバイル・ライブズを考える」である。この論文集の各章に掲載された質的研究について、川上は以下のことを主張する。「系統資料は、一定の場所を視点にした人口動向の数字である。その系統結果は、現代社会の一面を反映してはいるが、ポストモダン社会に生きる一人ひとりの個別的な動態的で複合的な生のリアリティは十分に把握できない」(p.245)。この中の「ポストモダン」や「リアリティ」の概念がどういう意味で用いられているのかに対しては疑義が残るが、個人の移動の軌跡を追跡するという形で具体的な個人に焦点を当てることは、確かに、重要な研究結果を提供すると評者も考える。川上によれば、「移動」は単に「ある経験」であるのみならず、永遠に新しい行動を生み出す「心的傾向性」であるという。なお、本書の最後には、編集者間の「展望討論」と三宅和子による「あとがき」が掲載されている。

『移動とことば』は、日本で二十年ほど前から取り沙汰されるようになった「批判的な社会言語学」の流れを汲む研究であると解される。本書は、これまでわれわれが培ってきた常識的な事象についての、より新たなレベルでの省察が促される。例えば、日本（語）をめぐる文脈では「多様性」それ自体が「多様」であり、ことばをめぐる諸問題を、個別的で具体的な事例の想定なしに、単なる一般妥当性のあるものとして論じることは難しいという問題である。このような状況を克服するためには、つねに、ケーススタディに基づく新しい理論の主張が必要である。この点、本書の最も注目すべき特徴は、各種事例とともに「移動」が理論化されていることにあると思う。どの著者も、被験者によって異なる形式を持つ生活ないしライフスタイル上の「選択肢」や「アイデンティティ構築法」等々の問題をよりよく理解するために、発見的に「移動」を理論化している。言語と話者は分離不可能であるから、人（話者）がモバイルであるなら、その「ことば」も必然的にモバイルな性格をもつ。生活背景が多様な「モバイル・スピーカー」どうしがある特定のコンテキストで出会うことにより、そこからさらに、個別的で多様な「モビリティ」、つまり、「移動性」が生まれ、それを通して具体的なコンテキストに沿った「社会的意味」が生み出される。こうした構造から成る出会いと意味生成を記述することは社会言語学の最も大切な課題である。

本書のもう一つの重重な特徴は、どの著者も若者の言語教育について熟練しているということである。どの研究においても、子どもと若者に対する親密さや共感を感じ取ることができ、事例に対する深い洞察も見られる。この意味で、言語教育者としての視点から行われたこの研究に対し、評者は賞賛の念を抱く。しかし、その傍らで、社会言語学の立場において次のような疑問も抱く。日本の社会言語学における認識論的フレームワークの形成ないし統制を左右するような重要な議論の最前線に言語教育者が立つという構図が

生じるのはなぜなのか。結局のところ、社会言語学は、特定の理論と定形の方法論を用いて行なう種類の研究分野とは異なる。それは、社会の変化に応じて進化し、発展する必要がある（Smakman & Heinrich 2015）。この点、いわゆる「第一波」の「古典的な社会言語学」は、かなり固定的で定型化されているという特徴をもつため、これまで紹介してきたような、現代生活における「移動性」を効果的に浮き彫りにする研究が遂行できるとは言い難い。対象である社会が変化するなら、社会言語学もつねに新しいアプローチを試みながら発展していかなければならない。

社会言語学の研究のためには、基本的に二つのスキルが必要である。一つは、「現代社会で何が起こっているのか」を見分けるスキルであり、もう一つは、「現代社会にとって適当なあるいは意義のあるプロジェクトと方法論」を開発し、それらを適用するスキルである。本書『移動とこども』はこの両方のスキルを兼ね備えている。

とば

参考文献

アーリ，ジョン（2015）『社会を越える社会学――移動・環境・シチズンシップ』（改装版、吉原直樹監訳）、法政大学出版局。

Blommaert, Jan (2010) *The Sociolinguistics of Globalization*, Cambridge: Cambridge University Press.

Eckert, Penelope (2018) *Meaning and Sociolinguistic Variation: The Third Wave in Sociolinguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.

川上郁雄（2011）『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版。

Smakman, Dick & Patrick Heinrich (eds.) (2015) *Globalising Sociolinguistics: Challenging and Expanding Theory*, London: Routledge.

本文中に出てこない？
重要なら入れておいてもOKです。